

# あるオニグルミの樹のお話

「もし、ひっかけたら五万円載きますよ」と念を押される。丸太を持ち込み製材してもらったときの、工場責任者の言葉です。

ひっかけたらとは、丸太の中にくいこんでいるかも知れない釘や針金の事で、いたんだ帯鋸をとりかえ修理する費用の事なのです。

街なかで育った樹には往々にしてある事なのです。

私の場合をお話してみましよう。

晩い秋の事でした。私の木彫教室の生徒さんから「知り合いの方の庭のクルミをもらって欲しい」と。有難い事です。早速下見に参りました。街角を曲って「あの樹です」と指さされたとき「あつ、嬉しい」と叫んでしまったほどです。二階屋の屋根をはるかにしないで、葉を落した樹影がそびえています。はたしてオニグルミか、ベルシヤグルミかと胸がときめきます。と申しますのには訳があります。

クルミについて少しばかり。クルミは胡桃と書きますのでベルシヤ(イラン)原産である事が伺われます。胡弓、胡瓜等のように、

古代中国はよその国から入って来たものに胡の字を冠したと聞いております。胡桃とは、果実の形が桃ににているのでこの名がついたと思われまます。やがて十六世紀後半日本に渡つてきて拡がり、北海道では滝川あたりが北限だそうです。

果実(核果)を包む殻(内果皮)がうすく、両手に一ケずつもち、それを手を合せ打つとたやすくわれるのでテウチグルミ、信州で多く植栽されたのでシナノグルミ、核果をお菓子に使うのでカシグルミと分かれています。これが、それぞれの呼び名なのか、亜種なのか知りませんので、私はベルシヤグルミと呼んでおります。

クルミへの私のこだわりはまだあります。私が所有する同じ直径四十センチのオニグルミとベルシヤグルミの切断面(木口)をくらべますと、前者は辺材(しらた)部分四センチ、心材(あかみ)部分三十六センチ。後者は、辺材部分十四センチ、心材部分二十四センチなのです。私は、原則として辺材は捨てますから、使用可能な材の体積は大きなちが

オニグルミでつくった器

## ◎山岸 憲史

いがあり、さらに、芯と呼ばれる髓から半分になりますので、その差は大きくなります。つまり、ベルシヤグルミは、見た目の体積の半分しか使えないのです。また、樹高五メートル位、即ち直径二十センチ位の太さでは心材がまだ出来ていません。したがってそこそこのベルシヤグルミを載いても、私にとって用材として役に立たぬわけなのです。

誤解があつてはならぬので書きそえますが、樹種と使用目的によつては辺材も使われますが、ブナ、エリマキと言う面白い俗名を持つツリバナ類、サワグルミ、これらの樹は心材はなく(偽心材たまにあり)、すべて辺材でなりたつています。また、ベルシヤグルミの名誉のために申しあげますが、その心材の風合いは美しく、材質はオニグルミよりかたく丈夫なのです。

胸をときめかしたと申しあげたのは、以上のような事柄があり、オニグルミが欲しかったからなのです。

近よりました。たてに深いしわを持つ樹皮、オニグルミでした。まぶしい思いで樹を見あ

げました。なんと凍裂のあとが一メートル半もあるではありませんか。しかも、南側に面している部分です。この現象を札幌で見られるのは珍しい事です。凍裂とは、樹が過冷却の状態にあるとき、風や、何かの衝撃で、一瞬の中に樹皮が裂ける事と聞いています。

この樹の樹皮は、いまだ十三センチほどの口をあけ、その樹皮下、両側から新しい木質部が傷口をいたわるように盛り上り、むき出しの木肌をおおいかくそうとしているもの、まだ四センチほど残っております。あとで分った事ですが、年輪をかぞえてみて、昭和十四年三月のマイナス十七・七度に下がったときに符合するのです。きつと樹液があたりはじめていたのでしょう。その凍裂によって、木質部をとりまく形成層に異常がおきたのでしよう、その前年の秋目との間に、わずかでずがすまが出来ていました。剣離するのです。大きな用材にむきません。凍裂は、枝のない利用価値の多い部分によくおきるようです。

さて、その傷から上へ目をやりますと、直径二十センチ位の伐られた古枝の名ごりが三十センチほどつき出ています。風化したその古枝からの腐れがどれほど幹の中に進んでいるか、一寸気がかりです。しかし、胸高四十センチもある大木ですから誠に嬉しい載きものです。

積雪時に伐る事として戻りました。

三月のあたたかな日、枝払いと落枝の整理よくぞこんなにと驚くほど繁っております。この枝は、布や木を染めるために煎汁をとり

ます。二日目、枝とよぶ事が出来ぬほど太い部分に鋸を入れます。チェンソーです。三月と言うのに樹液はたつぷりあがっており、頬に冷たくはねて来ます。二股に鋸を入れました。稍あつてガキツと音。八番線です。十三年ほど前に、物置小屋の修理の折、樹に針金をかけた記憶があるとの事。忘れものだったわけです。

太い枯枝を持つ幹にかかりました。案の定、髓の近くまでななめに四十センチ、幅十五センチほど腐れがのびておりました。残念です。さて、最も嬉しい太い部分です。またまたオヤツと思つたのです。やわらかすぎるのです。とにかくおかしい。倒して、のぞきこむ、なんと、木口いっぱい虫食いです。穴の中に白いイモ虫風なものがかうごめいています。これまた残念です。が、ともあれ私の仕事場へ運びこみました。やれやれです。

それからの手はずですが、樹皮をはぎ、染料用にとりまとめ、髓の所から二ツ割にし、木口には木工用接着剤をぬり紙をはります。こうしますと、乾燥はおそくなりますもの、木口にひび割れが少なく歩留りがよいのです。虫食いは思ったよりのびておらず一安心です。

さて、このオニグルミには後日談がありました。半年後、乾燥のために荒どりにかかりました。両木口をたちおとし、年輪をかぞえます。約六十本。偽年輪(虫や、冷氣のため秋目にいたものが出来る)をなしとして六十プラスX(伐つた所の第一の年輪が出来るまで

の年数)で、オニグルミの伸びは早いので、Xを四年と考えると六十四年前に芽生えたものとわかりました。

話を戻して、半割りの材の底部(半円の部分)をけずり安定させた上で、髓が残っている面を彫りはじめたとき、暗紫色が掌二ツほど抜がっています。木口面からみると大分深い、釘がかくれているのです。もとの樹形を思うとき人の背の高さです。注意深く彫ります。どこにあるかわからないからです。いやなものです。やがて、釘がたちきられた小さな光りをみつけました。樹に守られて錆びきつてはいないのです。そのまわりを彫ります。め、ペンチでぬこうと思つたのですが駄目です。釘の頭がひつかかっているのです。器の側壁の上の部分にあたるので困りました。ようやくとりのぞいたものの側壁がうすくなり、高さをひくめなければならなくなり、原型が半円なのです。高さをとおせば当然小さくなるわけです。三十五センチの幅をどの目算が二十九センチになつてしまいました。と申しても、長さ五十三センチ、高さ六センチの大きな器が出来あがりました。

腐れ、虫食い、凍裂、そのためにによる秋目の損傷、針金、釘等の負目を持つても、このオニグルミは、枝を繁らせ、たわわに実をつけておりましたものの、用材としての第二の出発には、残念ながら充分な役割りを果せませんでした。と思うのは、全く、勝手な人間のエゴなのでしょう。

(木工業)